

進路決定自己効力に対する自我同一性 及び自己統制感の影響

— 中学生を対象とした追跡的研究 —

宮崎 太一*・西川 和夫**

**The Influence of Ego Identity and Locus of Control
on Career Decision Making Self-Efficacy:
A follow-up study with junior high school students**

Taichi MIYAZAKI and Kazuo NISHIKAWA

要 約

本研究は、中学生の進路決定自己効力に対して、自我同一性や自己統制感がどのような影響を持つのかを調べるために行われた。そのため、中学生 447 名を対象に、中学生用進路決定に対する自己効力 (Career Decision-Making Self-Efficacy; 以下 CS) 尺度、多次元自我同一性尺度 (Multidimensional Ego Identity Scale; 以下 MEIS)、成人用一般的 Locus of Control 尺度 (以下 LOC) を用いて分析を行った。因子分析の結果、CS 尺度は「将来展望」と「主体的決定」に、MEIS は「自己斉一性・連続性」「対他的同一性」「対自的同一性」「心理社会的同一性」という下位尺度に分かれ、LOC は単一因子となった。重回帰分析の結果、「将来展望」に対しては「対自的同一性」の比較的強い影響が確認され、それ以外の「自己斉一性・連続性」「対他的同一性」「心理社会的同一性」及び LOC の影響は確認されなかった。また、「主体的決定」に対しては、いずれの説明変数の影響も確認されなかった。このことから、自分の在り方や生き方についての鮮明な感覚を持つことは、自分の将来の進路について意識したり考えたりすることの様に、自己の内面で完結する進路決定課題についての自信を高めるが、自分の希望する進路と現実の選択肢との具体的な調整をすることの様に、外界への働きかけが必要な課題についての自信には、直接的な影響力を持たないことが示唆された。

問 題

文部科学省 (2002) の報道発表によれば、平成 13 年度における高等学校中途退学者数は 104,894 人であり、生徒全体に占める割合は 2.6% にのぼる。中途退学者数の割合は平成 4 年及び 5 年に一旦 2% を切ったものの、平成 6 年から再び上昇し、平成 10 年に 2.6% に達したあと、現在まではほぼ横這い状態となっている。また、平成 13 年度の

中途退学の理由については、「学校生活・学業不
適応」が 38.1% と最も多く、次いで「進路変更」
が 36.3% となっている。

このような中途退学者の状況に対して、以前から、中学校の進路指導における不備が原因として指摘されてきた。つまり、中学校の進路指導が学業成績によって振り分け的行われたために、無目的進学や不本意入学が生じ、中途退学者の学校不適応の原因となっている (文部省, 1994) というのである。これまでの中途退学者数の推移から考えると、批判がなされた当時から現在まで状況が改善されているとは言い難い。

* 三重県知的障害者福祉センター はばたき

** 三重大学教育学部

この問題を考える上で、本研究では、「進路決定自己効力 (Career Decision-Making Self-Efficacy)」という概念に着目してみたい。進路決定自己効力とは、Bandura (1977) の提唱した自己効力 (self-efficacy) の概念を進路関連領域に応用したものであり、ある特定の分野を自分の進路として選択する過程そのものについて、どの程度自信を持っているかを示すものである (廣瀬, 1998)。自己効力は、ある特定の課題に対する働きかけの程度やそれに伴う結果の水準、課題の遂行における努力や忍耐の程度を決定し、またそれを操作することによって、行動を変容させることができると定義されている (廣瀬, 1998)。この定義に従えば、進路決定自己効力は、進路決定課題に対する働きかけやそれに伴う結果の水準、努力の程度、我慢強さを決定するものであると考えられる。

実際に、高校生や大学生を対象とした研究では、進路決定自己効力は、いくつかの進路決定上の重要な要素との関連が指摘されている。例えば、日本国内における研究では、高校生の進路成熟との関連 (浦上, 1993) や、女子短大生の職業不決断との関連 (浦上, 1995)、大学生の職業忌避的傾向との関連 (古市, 1995)、大学生の進路決定行動との関連 (富安, 1997) などが挙げられる。このように、進路決定自己効力は実際の進路決定に影響を与える可能性のあるものとして、先行研究においてその重要性が指摘されているのである。中学校進路指導においても、この進路決定自己効力を高めていくことによって、生徒自らの積極的な進路選択行動を促進し、そのことが学校不適応や無目的入学といった問題にも有効に働くことが期待される。

では、進路決定自己効力を高めるには、どのような方策が考えられるのか。自己効力の源泉として、Bandura (1995) は、忍耐強い努力によって障害に打ち勝つ体験 (制御体験) や、モデリング (代理体験) の重要性に言及しているが、進路選択は機会そのものが少ないため (廣瀬, 1998)、特にこれまでに進路選択を経験していない者がほとんどである中学生にとって、自己効力をこのような体験によって高めることは難しい。しかし一方で、これまでに経験の無い新規の事態である進路決定行動についても、人はその行動が自分にとって遂行可能かどうかについての自分なりの判断 (自己効力) を持っているものと考えられる。

初期の進路決定における自己効力について扱っ

た研究はほとんど見られないが、国内の中学生を対象とした長谷川 (1999) の研究では、領域ごとに測定された自尊感情 (「家族」「学力」などの7領域) と進路決定自己効力との間に $r = .22 \sim .40$ の有意な正の相関が得られている。しかし Damon (1983) は、「子どもの自尊心に関する研究は、子どもが自分自身を肯定的に評価するか、または否定的に評価するかという程度についての研究であるため、子どもの自己概念の性質をとらえきれない」と述べており、自尊心が個人の自己概念を表現するものとして十分ではないことを指摘している。中学校の進路指導において研究の知見を活用するためには、個人の自己概念の内容を広く一般的に扱い、それらが進路決定自己効力にどのように影響するのかを検討することが必要ではないかと思われる。

この点について、本研究では、自我同一性 (Ego Identity) と Locus of Control という2つの概念に着目してみたい。自我同一性 (Ego Identity) とは、Erikson (1959) が提唱した自我の漸成発達理論における中核的な概念であり、特に青年期において問題となる発達課題としても位置付けられている。Erikson (1959) は、自我同一性の感覚について、「内的な斉一性 (あるいは不変性 sameness) と連続性を維持する個人の能力が、他者に対して自分が持つ意味の斉一性と連続性とに調和することから生じる自信」であると定義している。

自我同一性と進路決定自己効力との関係を扱った研究は見られないが、自らの生き方や在り方に関する意識である自我同一性の感覚が、これからの進路を決定するための行動の遂行可能性に対して、少なからぬ影響を持つことは容易に推測できよう。自我同一性が持つ機能的側面について、鑑 (1995) は「鮮明なアイデンティティをもちえていることは、(中略) 選択の可能性を遂行することを容易にすることができる。その中には、自己の個人としての価値や重要度の階層が形成されていることを意味している。したがって、方向性を持った生活や行動をとることができやすい」と述べており、これは上記の推測を支持する内容であると言える。

また、前述の富安 (1997) の大学生を対象とした研究では、早い時期に今後の進路目標を決めていた者ほど、現在の進路決定自己効力が高く、特に高校入学前に決めていた者と大学時代に決めた

者とは、前者の自己効力が有意に高いことが確認されている。このことも、自分の生き方や在り方についての鮮明な感覚つまり鮮明な自我同一性を持ち得ていることが、進路決定自己効力を高める働きを持つ可能性を示唆していると言えよう。

一方、Locus of Control とは、Rotter (1966) の提唱した概念であり、自分の行動と強化の生起が随伴しているかどうかについての般化された期待のことである。自分の行動と強化が随伴しているという信念を内的統制 (internal control)、逆に随伴していないという信念を外統制 (external control) と呼ぶ。なお、Locus of Control は研究によって「統制の所在」「統制感」「自己統制感」といった訳語が当てられているが、本研究において扱う Locus of Control は、自分自身の一般的な行動についてのものであるため、これを「自己統制感」と呼ぶことにする。

自己統制感の発達には、これまでに環境や周囲の人々が自分の意志や行為にどの程度反応してきたかが影響しており、Damon (1983) は、人々からの反応が長時間ないという生育史をもつ人は、内的な自己統制感の発達の面で明らかに不利であると述べている。このことは、自己統制感の程度が、自分や他者の努力が実ることを確認することによって育てられていく自己効力と、その基盤を共有していることを示しているものと考えられる。Luzzo ら (1996) の研究では、自らの進路発達に対して外的な自己統制感を持つ人に対して、進路選択での成功を努力や忍耐に帰属することを強調するビデオを見せると、進路決定自己効力が高まることが確認されているが、これは自己統制感に働きかけることによって自己効力を高めることができることを示しており、上記の考えを支持する結果であると言えよう。

以上のように、自己統制感は自己効力と関連のある概念であり、それに働きかけることによって自己効力を高めることが可能であるため、進路決定自己効力の程度にも影響するものと考えられる。

目 的

進路決定自己効力と、自我同一性、自己統制感との関連について分析し、中学生の自己概念の在り方が進路決定自己効力に与える影響について検討していく。

方 法

調査対象

三重県内の公立中学校に通う中学3年生 (全4校、計18クラス) を対象として、追跡的に調査を行った。第1回調査では613名 (男子336名、女子274名、不明3名) の回答を、第2回調査では616名 (男子342名、女子274名) の回答を得た。そのうち、欠損値のあるものや、計2回の調査のうち1度でも不参加であったデータを除外した結果、最終有効回答数は447名 (男子237名、女子210名) であった。

調査期間及び手続き

第1回調査は2002年7月中旬、第2回調査が2002年10月下旬に行われた。調査内容は第1回、第2回とも同様であり、以下の3つの尺度が含まれた質問紙が、各中学校のクラス単位で一斉に実施された。

調査内容

(1) 中学生用進路決定に対する自己効力 (Career Decision-Making Self-Efficacy) 尺度 (以下、CS と略記)

Taylor & Betz (1983) と浦上 (1991) の尺度をもとに、長谷川 (1995) が中学生用に内容を改めて作成したものを用いた。中学生の進路決定に関わる様々な課題や意識について、「目的意識・課題解決」「情報収集・主体的計画」「自己理解・主体的決定」という3つの下位尺度を想定して、進路決定自己効力を測定している。得点が高いほど、進路決定自己効力が高いことを表す。全15項目で構成されており、「1 そう思わない」から「5 そう思う」の5件法によって回答を求めた。

(2) 多次元自我同一性尺度 (Multidimensional Ego Identity Scale; 以下、MEIS と略記)

谷 (2001) は、青年期における自我同一性の構造を明らかにするために、Erikson の著作における自我同一性の記述に着目し、自己の不変性及び時間的連続性についての感覚を意味する「自己同一性・連続性」、他者から見られているであろう自分自身が本来の自分自身と一致しているという感覚を意味する「対他的同一性」、自己意識や目標の明確さの感覚である「対自的同一性」、そして現実の社会の中で自分自身を意味づけられるという、自分と社会との適応的な結びつきの感覚である「心理社会的同一性」という4つの下位概念を見出し、それらを下位因子とする質問紙を作成

した。各因子について5項目、全20項目で構成されており、「1 全くあてはまらない」から「7 非常にあてはまる」の7件法によって回答を求めた。得点が高いほど、自我同一性の感覚が各側面において確かであることを表す。

(3) 成人用一般的 Locus of Control 尺度 (以下、LOC と略記)

Rotter (1966) の作成した尺度をもとに、鎌原ら (1982) が国内向けに項目を選定したものを用いた。得点が高い場合は内的統制 (Internal Control)、低い場合は外的統制 (External Control) と定義されるが、基本的には1次元的な変数である。得点が高いほど、内的な自己統制感をもっていることを表す。全18項目で構成されており、「1 そう思わない」から「4 そう思う」の4件法によって回答を求めた。

分析デザイン

7月に測定された多次元自我同一性尺度の各下位尺度得点、及び成人用一般的 Locus of Control 尺度の総得点を独立変数、10月に測定された進路決定自己効力尺度の総得点及び各下位尺度得点を従属変数として、重回帰分析を行う。また、分析は重回帰分析の結果だけではなく、単純相関の結果をも適宜参照しながら行うものとする。

なお、これまでの進路に関する自己効力研究や自我同一性研究において男女差の有無に焦点を当てたものが多いことを考慮して、分析は全体のものとして男女別のものを行った。

予 測

鮮明な自我同一性の感覚が進路決定自己効力を高めるという予測については問題の部分でも述べたが、ここではその自我同一性の内容について、谷 (2001) の MEIS の下位概念と照らし合わせながらより詳細な予測を立てていきたい。

まず「自己斉一性・連続性」のうち特に連続性について、鱸 (1995) は「将来に対してはあやふやであるに関わらず、これ (自己の時間的連続性) を一種の確信としているのが普段の私たちの生活である」と述べており、連続性の確信と将来に対する具体的な見通しとがあまり関わりを持たないことを示唆している。また「対他的同一性」は、自分自身の在り方や目的意識と直接関わるものではなく、それらを身近な他者が理解しているかどうかという感覚であるため、やはり進路決定自己

効力とはあまり関連が無いものと考えられる。

一方、「対自的同一性」は、自らの進路や目標に対する明確さそのものを表す内容であり、前述の富安 (1997) の研究結果からも、進路決定自己効力に影響することが考えられる。また「心理社会的同一性」も、現実の社会の中で自分自身を意味づけられるという感覚であり、自らの望む生き方 (進路) を社会の中で選んでいくことができるという自信を表している。これも、進路決定のための行動を遂行できるという自信 — つまり、進路決定自己効力に影響する概念であると言えるだろう。

以上の自我同一性の各下位概念に関する考察、及び前述の自己統制感の進路決定自己効力への影響についての考察を踏まえ、本研究では以下のような仮説を立て、それを検証していくことにする。

1. 事前に測定された対自的同一性の得点が高いほど、それ以降に測定された、進路決定自己効力の各尺度得点が高い。
2. 事前に測定された心理社会的同一性の得点が高いほど、それ以降に測定された、進路決定自己効力の各尺度得点が高い。
3. 事前に測定された自己統制感の得点が高い (内的統制である) ほど、それ以降に測定された、進路決定自己効力の各尺度得点が高い。

結果と考察

1. 各質問紙尺度の因子構造の検討

「中学生用進路決定に対する自己効力尺度」(CS) 及び「多次元自我同一性尺度」(MEIS) について、尺度作成時の調査対象の違い、及び分析方法の適合性の観点から、本研究において改めて因子分析を行うことにした。分析に当たっては、7月及び10月の調査によって得られた有効データを縦に連結し、7月+10月のデータ (N=447×2=894) を用いて因子分析を行った。また、各尺度の因子や項目は、因子について初期の固有値が1以上、項目はプロマックス回転後の最大因子負荷量が.40以上という基準によって選定された。

(1) 中学生用進路決定に対する自己効力尺度 (CS)

本尺度については、先行研究において主因子法・バリマックス回転によって得られた因子構造が示されている (長谷川, 1995; 1999) もの、下位尺度間の相関で $r=.59\sim.74$ という極めて高い値

が得られており、また調査対象者の年齢段階も本研究とは異なる（中学2年生が対象）ため、CSの全15項目について主因子法・プロマックス回転による再分析を行った。その結果、固有値の推移および因子の解釈可能性の点から、2因子解として解釈することが妥当であろうと考えられたため、全10項目を本研究におけるCSの項目として採用した。回転後の因子パターンをTable 1に示す。

第1因子には、将来の生き方や目標について問う項目が高い負荷を示している。よって、この因子を「将来展望」と命名した。第2因子には、自らの興味や適性、能力を理解した上で、主体的に進路決定をしていけるかどうかを問う項目が高い負荷を示している。よって、この因子を「主体的決定」と命名した。以下、それぞれの因子に負荷の高い項目の粗点合計を、それぞれの下位尺度の得点とする。また、本尺度の因子間相関は.58、下位尺度間相関は.43 ($p < .001$)であった。従って、各因子及び各下位尺度は相互に関連していると言える。

尺度の信頼性を検討するため、CS全体及び各下位尺度の α 係数を算出したところ、CS全体で.82、「将来展望」で.78、「主体的決定」で.76となり、いずれも高い内的一貫性が認められた。ま

た、約3ヶ月の間隔における再検査法による信頼性を算出した。その結果、CS全体で.66、「将来展望」で.67、「主体的決定」で.60となり、比較的高い信頼性が得られている。

(2) 多次元自我同一性尺度 (MEIS)

MEISの全20項目について、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行ったところ、複数の因子に負荷の高い2つの項目が削除された以外は、先行研究(谷, 2000)と同じ構造の4因子が得られ、18項目を本研究におけるMEISの項目として確定した。回転後の因子パターンをTable 2に示す。なお、各因子名については、先行研究の命名をそのまま採用し、第1因子を「自己斉一性・連続性」、第2因子を「対他的同一性」、第3因子を「対自的同一性」、第4因子を「心理社会的同一性」とした。以下、それぞれの因子に負荷の高い項目の粗点合計を、それぞれの下位尺度の得点とする。また、本尺度の因子間相関及び下位尺度間相関はTable 3の通りである。因子間相関は.36～.70、下位尺度間相関は.34～.63 (いずれも $p < .001$)であった。従って、各因子及び各下位尺度は相互に関連していると言える。

尺度の信頼性を検討するため、MEIS全体及び下位尺度の α 係数を算出したところ、MEIS全体で.90、「自己斉一性・連続性」で.89、「対他的同

Table 1 CS 尺度の因子パターン

| 項 目 | F1 | F2 | h ² |
|---|------|------|----------------|
| 第1因子 将来展望 | | | |
| 10. 自分の理想の仕事を思い浮かべることができる。 | .81 | -.16 | .53 |
| 4. 将来のライフスタイル(生き方)について自分なりの考えを持っている。 | .74 | -.05 | .51 |
| 13. 将来のために、高校や専門学校でやってみたいことができ、また就職してもその後の生き方について考えることができる。 | .63 | -.12 | .50 |
| 8. 将来の目標に向かって、数年先まで計画を立てることができる。 | .62 | -.01 | .40 |
| 第2因子 主体的決定 | | | |
| 9. 自分の能力が最も発揮できる高校・学科、専門学校や職業を選ぶことができる。 | .10 | .69 | .57 |
| 6. 自分の能力に合うと思われる高校・学科、専門学校や職業を選ぶことができる。 | .01 | .69 | .48 |
| 3. 自分の趣味や関心に合うと思われる高校・学科、専門学校や職業を選ぶことができる。 | .20 | .56 | .48 |
| 11. 両親や友達がすすめる高校・学科、専門学校や職業であっても、自分の能力や適性に合っていないと感じるものであれば断ることができる。 | -.16 | .55 | .23 |
| 12. 本当に好きな高校・学科、専門学校や職業に進むためには、両親を説得することができる。 | -.12 | .55 | .24 |
| 14. 現在考えているいくつかの高校・学科、専門学校や職業の中から少しずつ一つ一つにぼっていきることができる。 | -.05 | .48 | .26 |
| 2 乗 和 | 2.77 | 2.81 | |

一性」で.83、「対自的同一性」で.82、「心理社会的同一性」で.78となり、いずれも高い内的一貫性が認められた。また、約3ヶ月の間隔における再検査法による信頼性を算出した。その結果、MEIS全体で.75、「自己斉一性・連続性」で.72、「対他的同一性」で.65、「対自的同一性」で.69、「心理社会的同一性」で.57となり、比較的高い信頼性が得られている。

(3) 成人用一般的 Locus of Control 尺度 (LOC)

これまでの先行研究から因子数を1とし、全18項目を本研究における自己統制感尺度として確定した。尺度の信頼性を検討するため α 係数を算出したところ、LOC尺度全体で.77となり、高い内的一貫性が認められた。また、約3ヶ月の間隔における再検査法による信頼性を算出した。その結果、.70という十分な値が認められた。

2. 各変数の記述統計量

7月時点の MEIS と LOC、及び10月時点の

Table 2 MEIS の因子パターン

| 項 目 | F1 | F2 | F3 | F4 | h ² |
|-----------------------------------|------|------|------|------|----------------|
| 第1因子 自己斉一性・連続性 | | | | | |
| 1. *過去において自分をなくしてしまったように感じる。 | .94 | -.15 | -.03 | -.02 | .67 |
| 5. *過去に自分自身を置きざりにしてきたような気がする。 | .89 | -.05 | -.06 | -.01 | .70 |
| 9. *いつのまにか自分が自分でなくなってしまうような気がする。 | .78 | .10 | -.05 | .02 | .70 |
| 17. *「自分がない」と感じることもある。 | .57 | .12 | .07 | .11 | .56 |
| 13. *今のままでは次第に自分を失ってってしまうような気がする。 | .55 | .20 | .01 | .07 | .55 |
| 第2因子 対他的同一性 | | | | | |
| 3. *自分のまわりの人々は、本当の私をわかっていないと思う。 | -.05 | .76 | -.09 | -.01 | .48 |
| 15. *本当の自分は人には理解されないだろう。 | -.01 | .75 | -.02 | .05 | .58 |
| 11. *人に見られている自分と本当の自分は一致しないと感じる。 | .05 | .71 | .02 | -.13 | .51 |
| 19. *人前での自分は、本当の自分でないような気がする。 | .09 | .68 | .09 | -.06 | .57 |
| 7. 自分は周囲の人々によく理解されていると感じる。 | -.12 | .63 | -.08 | .27 | .44 |
| 第3因子 対自的同一性 | | | | | |
| 6. 自分がどうなりたいかははっきりしている。 | -.10 | -.08 | .82 | .03 | .62 |
| 2. 自分が望んでいることがはっきりしている。 | -.09 | -.11 | .81 | .05 | .61 |
| 10. 自分のすべきことがはっきりしている。 | -.02 | -.06 | .63 | .18 | .50 |
| 14. *自分が何をしたいのかよくわからないと感じるときがある。 | .12 | .14 | .58 | -.13 | .42 |
| 18. *自分が何を望んでいるのかわからなくなることがある。 | .17 | .20 | .57 | -.09 | .53 |
| 第4因子 心理社会的同一性 | | | | | |
| 8. 現実の社会の中で、自分らしい生活を送れる自信がある。 | .03 | .02 | -.01 | .79 | .64 |
| 4. 現実の社会の中で、自分らしい生き方ができると思う。 | .01 | .03 | .03 | .75 | .61 |
| 12. 現実の社会の中で自分の可能性を十分に実現できると思う。 | .06 | -.04 | .18 | .51 | .40 |
| 2 乗 和 | 5.19 | 4.94 | 3.96 | 3.39 | |

注) * がついている項目は、逆転項目を表す。

Table 3 因子間相関 (右上) と下位尺度間相関 (左下)

| | 自己斉一性 ・連続性 | 対他的 同一性 | 対自的 同一性 | 心理社会的 同一性 |
|-----------|---------------|------------|------------|--------------|
| 自己斉一性・連続性 | | .70 | .41 | .38 |
| 対他的同一性 | .63*** | | .36 | .39 |
| 対自的同一性 | .41*** | .34*** | | .54 |
| 心理社会的同一性 | .39*** | .35*** | .50*** | |

***p<.001

CSの各得点について、全体及び男女別平均、標準偏差、性差の有無をまとめたものをTable 4に示す。t検定の結果、有意な性差が見られたのは、MEIS総得点 ($t=2.66, df=445, p<.01$)、「対自我的同一性」($t=2.41, df=445, p<.05$)、「心理社会的同一性」($t=3.74, df=445, p<.001$) についてであり、いずれも男子の方が有意に高かった。また、「自己斉一性・連続性」においても有意傾向 ($t=1.74, df=445, p<.10$) が見られ、全体的に男子の方が女子よりも高い数値を示す傾向が確認された。大学生を中心とした谷(2001)の先行研究では性差に関する記述は見られないが、一般的にこの時期の女子は性役割に対する葛藤が強く、そのことが自我同一性を男子よりも不安定なものにするのではないかと考えられる。

3. CSに対する自我同一性、自己統制感の影響

10月時点のCSと、7月時点のMEISの各下位尺度及びLOC間の単純相関、さらに説明変数同士の単純相関を全体、男女別に算出した(Table 5)。また、7月時点のMEIS各下位尺度、及びLOCを説明変数とし、10月時点のCS総得点及び各下位尺度を目的変数とした強制投入法による重回帰分析を、全体、男女別に行った(Table 6)。以下、その結果をCSの下位尺度ごとに記述して

いく。

(1)「将来展望」について

男女ともに、「対自我的同一性」において比較的強い正の標準偏回帰係数(男; $\beta=.56, p<.001$ 、女; $\beta=.51, p<.001$)が得られ、また調整済みR²も高いとは言えないものの有意な値であった。これは、予測1を支持する結果であった。また、男子では「自己斉一性・連続性」において負の標準偏回帰係数($\beta=-.16, p<.05$)が得られたが、かなり弱いものであった。「対他的同一性」では、男女ともに有意な標準偏回帰係数は得られなかった。これらは、「自己斉一性・連続性」や「対他的同一性」が、進路決定自己効力とはあまり関連を持たないという仮説の内容を支持するものであった。

しかし、「心理社会的同一性」については、男子において非常に弱い標準偏回帰係数($\beta=.15, p<.05$)が示されたのみであった。また、LOCについては有意な標準偏回帰係数が得られなかった。よって、仮説2と仮説3については支持されなかった。

(2)「主体的決定」について

「将来展望」の場合と同様、男女ともに、「主体的決定」に対する「自己斉一性・連続性」及び

Table 4 各変数の平均(M)・標準偏差(SD)と性差のt検定

| | | 全体 | 男子 | 女子 | 性差の検定 | |
|-----------|----|---------|---------|---------|---------|-----|
| | | (N=447) | (N=237) | (N=210) | t 値 | |
| CS 総得点 | M | 37.40 | 37.34 | 37.46 | -0.19 | |
| | SD | 6.65 | 6.35 | 6.98 | | |
| 将来展望 | M | 14.25 | 14.05 | 14.48 | -1.29 | |
| | SD | 3.55 | 3.51 | 3.58 | | |
| 主体的決定 | M | 23.15 | 23.30 | 22.98 | 0.77 | |
| | SD | 4.30 | 4.08 | 4.53 | | |
| MEIS 総得点 | M | 78.91 | 80.97 | 76.59 | 2.66** | 男>女 |
| | SD | 17.48 | 17.05 | 17.71 | | |
| 自己斉一性・連続性 | M | 24.12 | 24.66 | 23.50 | 1.74† | 男>女 |
| | SD | 7.11 | 7.44 | 6.69 | | |
| 対他的同一性 | M | 19.77 | 20.08 | 19.41 | 1.18 | |
| | SD | 5.91 | 6.00 | 5.79 | | |
| 対自我的同一性 | M | 22.36 | 23.04 | 21.60 | 2.41* | 男>女 |
| | SD | 6.36 | 5.98 | 6.69 | | |
| 心理社会的同一性 | M | 12.67 | 13.19 | 12.08 | 3.74*** | 男>女 |
| | SD | 3.16 | 3.05 | 3.20 | | |
| LOC | M | 51.23 | 50.88 | 51.63 | -1.10 | |
| | SD | 7.26 | 7.79 | 6.60 | | |

† $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

「対他的同一性」の有意な標準偏回帰係数は得られなかった。これらは、「自己斉一性・連続性」や「対他的同一性」が、進路決定自己効力とはあまり関連を持たないという仮説の内容を支持するものであった。また、男子と女子では、「主体的決定」に関連する変数が若干異なっていた。男子では、「対自的同一性」において弱い正の標準偏回帰係数 ($\beta = .31, p < .001$) が、女子では、「心理社会的同一性」において弱い正の標準偏回帰係数 ($\beta = .25, p < .001$) が得られた。

このことで、仮説1と仮説2について、性別によって異なる可能性が示されたが、これを性差として解釈することには注意が必要であると思われる。それぞれ有意な変数の標準偏回帰係数は弱い値であり、男女ともに「対自的同一性」と「心理

社会的同一性」との相関は比較的高い(男子では.48、女子では.52)。また「将来展望」の場合とは異なり、「主体的決定」との単純相関は、「対自的同一性」と「心理社会的同一性」とで大きな違いはなく(男子では.10の差、女子では.09の差)、しかもともに弱いものである ($r = .28 \sim .39$)。加えて、調整済み R2 自体が非常に低い値であった。これらのことから、男女によって有意である変数が異なっているのは、偶然であるという可能性を否定できない。よって、これを性差として考察することは控えることにする。

また、LOCについては、女子において標準偏回帰係数が有意傾向 ($\beta = .13, p < .10$) を示したのみであった。よって、仮説3は支持されなかった。

Table 5 各変数間の相関

| | | CS | | | 自己斉一性・連続性 | 対他的同一性 | 対自的同一性 | 心理社会的同一性 |
|----|-----------|--------|--------|--------|-----------|--------|--------|----------|
| | | 総得点 | 将来展望 | 主体的決定 | | | | |
| 全体 | 自己斉一性・連続性 | .19*** | .11* | .20*** | | | | |
| | 対他的同一性 | .16*** | .09* | .16*** | .65*** | | | |
| | 対自的同一性 | .49*** | .52*** | .33*** | .42*** | .36*** | | |
| | 心理社会的同一性 | .38*** | .32*** | .33*** | .39*** | .33*** | .51*** | |
| | LOC | .28*** | .20*** | .26*** | .31*** | .34*** | .37*** | .42*** |
| 男子 | 自己斉一性・連続性 | .13* | .05 | .16** | | | | |
| | 対他的同一性 | .12* | .05 | .14* | .61*** | | | |
| | 対自的同一性 | .55*** | .54*** | .39*** | .38*** | .33*** | | |
| | 心理社会的同一性 | .37*** | .34*** | .29*** | .34*** | .24*** | .48*** | |
| | LOC | .24*** | .15* | .24*** | .31*** | .37*** | .35*** | .43*** |
| 女子 | 自己斉一性・連続性 | .26*** | .19** | .25*** | | | | |
| | 対他的同一性 | .20** | .15* | .19** | .69*** | | | |
| | 対自的同一性 | .45*** | .53*** | .28*** | .45*** | .39*** | | |
| | 心理社会的同一性 | .41*** | .33*** | .37*** | .44*** | .42*** | .51*** | |
| | LOC | .33*** | .27*** | .30*** | .34*** | .32*** | .42*** | .46*** |

Table 6 重回帰分析の結果

| | CS 総得点 | | | 将来展望 | | | 主体的決定 | | |
|----------------------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| | 全体 | 男子 | 女子 | 全体 | 男子 | 女子 | 全体 | 男子 | 女子 |
| 自己斉一性・連続性 | -.05 | -.10 | .03 | -.12* | -.16* | -.06 | .03 | -.02 | .10 |
| 対他的同一性 | -.05 | -.04 | -.07 | -.06 | -.06 | -.07 | .04 | -.02 | -.05 |
| 対自的同一性 | .41*** | .51*** | .31*** | .53*** | .56*** | .51*** | .19*** | .31*** | .07 |
| 心理社会的同一性 | .17** | .15* | .21** | .10* | .15* | .10 | .18** | .11 | .25** |
| LOC | .08† | .04 | .11 | .02 | -.04 | .05 | .11** | .10 | .13† |
| 重相関係数 R | .52*** | .57*** | .51*** | .54*** | .58*** | .54*** | .40*** | .41*** | .41*** |
| 重決定係数 R ² | .28 | .33 | .26 | .30 | .34 | .29 | .16 | .17 | .17 |
| 調整済み R ² | .27 | .31 | .24 | .29 | .32 | .27 | .15 | .15 | .15 |

†p < .10 *p < .05 **p < .01 ***p < .001

総合的考察

本研究では、進路決定自己効力に対する自我同一性、及び自己統制感の影響性について3つの仮説を示したが、進路決定自己効力（CS）尺度が最終的に「将来展望」「主体的決定」という2つの下位尺度に分かれたため、CS尺度の下位尺度ごとに3つの予測の成否を検討した。その結果、CS尺度の下位尺度のうち「将来展望」について仮説1が支持されたが、仮説2及び仮説3は支持されず、また「主体的決定」については3つの予測ともほとんど支持されなかった。即ち、「将来展望」に対する「対自的同一性」の比較的強い影響性が確認され、それ以外の「自己斉一性・連続性」「対他的同一性」「心理社会的同一性」及び自己統制感の影響は確認されなかった。また、「主体的決定」に対しては、どの説明変数の影響もほとんど確認されなかったのである。このことは、鮮明な対自的同一性—即ち自己の在り方や生き方に関する鮮明な意識を持つことが、自分の将来の進路に関して積極的・計画的に考えていけるという自信を高めることを示唆していると言えるだろう。

仮説2の「心理社会的同一性の影響」がほとんど確認されなかったことについては、現実社会において自分らしく適応していく（心理社会的同一性）という場合の「現実社会」が、中学生にとって想起しにくい内容であるか、あるいはこれから進学していく高校での対人関係のことを想起したために、自分の将来の生き方との関係があまり見出されなかったという可能性が考えられる。また、仮説3の「自己統制感の影響」、即ち内的な自己統制感を持つことが、進路決定自己効力を高めるという影響過程の存在も確認することはできなかった。竹綱ら（1988）は、自己効力と自己統制感の関係について、限定された課題における自己効力と（一般的な）自己統制感は独立であるが、両者の対象とする水準が一致すればある程度の相関が得られると考えても良い、と述べている。前述のLuzzoら（1996）の研究の結果は、進路発達に対する自己統制感に働きかけることによって、進路決定自己効力が高まるというものであり、両者の対象とする水準は一致していると言える。本研究では、これまでに進路決定に関する経験のほとんど無い中学生を対象としているため、より一般的な行動に関する自己統制感を扱ったが、中学生に

とって、それは進路決定課題とあまり関わりの無いものであったと思われる。

以上のように、「将来展望」において自我同一性のうち「対自的同一性」の影響が確認され、「主体的決定」において各変数の影響がほとんど確認されなかったことは、それぞれの下位尺度の性質を考えると、非常に興味深い結果である。進路決定自己効力は、進路決定課題の遂行可能性についての自信と定義されているが、本研究におけるCS尺度の2つの下位尺度は、課題の遂行という面における質的な差によって弁別されたと考えられることができる。即ち、「将来展望」における課題の遂行は、「10. 将来の理想の仕事を思い浮かべることができる」「8. 将来の目標に向かって、数年先まで計画を立てることができる」という項目が示すように、意識すること、思考することといった自己の内部で完結する性質のものである。一方、「主体的決定」における課題の遂行は、「6. 自分の能力に合うと思われる高校・学科、専門学校や職業を選ぶことができる」「12. 本当に好きな高校・学科、専門学校や職業に進むためには、両親を説得することができる」という項目が示すように、自分の考えと現実の選択肢との調整が求められる性質のものである。つまり、進路決定自己効力に対する自我同一性や自己統制感の影響は、進路決定課題における遂行の性質によって異なる可能性が考えられるのである。

本研究の結果からは、自己の内面で完結する遂行、即ち自分の将来の進路について意識することや考えることについての自信に、自我同一性の一側面である対自的同一性が影響することが確認された。しかし、外界への働きかけが必要な遂行、即ち自分の希望する進路と現実の選択肢との具体的な調整をすることについての自信に対して、自我同一性や自己統制感の影響は明らかにされなかった。つまり、自らの在り方や生き方についてははっきりとした考えを持つことは、積極的・計画的に自らの進路を選んでいこうとする姿勢に繋がるが、現実にあるいくつかの選択肢との調整をしていくような、より具体性の高い課題についての自信を高めるまでには至らなかったと言える。

本研究において明らかにされなかった部分に関する仮説については、大きく分けて次のような2つのものが考えられる。1つは、自我同一性や自己統制感が、現実的な選択や両親への説得といった、「遂行」の具体性の高い進路決定課題に関す

る自己効力（本研究における「主体的決定」）にとって重要な予測因とはなり得ないというものである。もう1つは、自我同一性や自己統制感が、他の何らかの要因を媒介して、この種類の進路決定自己効力に影響を与えるというものである。例えば、主体的選択が迫られる前の自我同一性の安定している群と不安定な群の「主体的決定」の間には有意な差は無いが、進路希望調査や職業体験を終えた後に、2つの群の「主体的決定」に有意な差が生じるということも考えられる。いずれにせよ、これまでの進路決定自己効力に関する研究では、情報収集、自己評価、問題解決などの内容別に下位尺度を設定したものが多く見られたが、これからの研究では、課題遂行の性質によって下位尺度を設定し、影響を与える要因が異なる可能性を考慮に入れた仮説を立てていくことが必要ではないかと思われる。

以上のように、本研究の結果から、中学生の進路意識を高め、積極的・計画的に自らの進路を考えていく事にとって、自我同一性の安定が重要な役割を持つことが示された。問題の部分でも述べたように、進路決定自己効力の高さは、無目的進学や学校不適応となる可能性を低め、より有益で満足度の高い進路決定が為されることを保障するであろう。これまでの進路指導では、生徒の学業成績に見合った高校や専門学校を紹介し意思決定を促したり、その学校を受けるよう学校側が指示するという傾向が強かった。これは、進路指導が、(進学や就職の)手段の獲得に成功することを指導の目的としていたためであると言える。このような進路指導においては、生徒が進路を選んでいくその過程において自らの興味や関心、能力について吟味し、それに見合った進路を選んでいくという、自己形成の視点が生かされることはむづかしい。進路決定自己効力に対する自我同一性の影響が一部ではあるが示されたことは、自己形成を促す視点の進路指導が、道義的な意味においてのみではなく、現実的な成果を挙げるといえるだろう。自己概念と、進路決定自己効力との関係を扱う研究が今後も進められていくことによって、進路指導における自己形成の視点の重要性と、それを推進していくための援助方法が共に広く認知されていくことが望まれる。

引用文献

- Bandura, A. 1977 Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, **84**, 191-215.
- バンデューラ A. 1997 激動社会における個人と集団の効力の発揮 バンデューラ A. (編著) 本明寛・野口京子 (監訳) 激動社会の中の自己効力 金子書房 Pp. 1-41.
- (Bandura, A. (Ed.) 1995 *Self-efficacy in Changing Societies*. Cambridge University Press.)
- デーモン W. 山本多喜司 (編訳) 1990 社会性と人格の発達心理学 北大路書房
- (Damon, W. 1983 *Social and Personality Development*. W. W. Norton & Company.)
- エリクソン E. H. 小此木啓吾 (訳編) 1973 自我同一性 アイデンティティとライフサイクル 誠信書房 (Erikson, E. H. 1959 *Identity and the life cycle*. International Universities Press.)
- 古市裕一 1995 青年の職業忌避傾向とその関連要因についての検討 進路指導研究, **16**, 16-22.
- 長谷川龍彦 1995 中学生用進路決定に対する自己効力測定尺度作成の試み 学校教育研究, **6**, 31-47.
- 長谷川龍彦 1999 中学生の自尊感情と進路選択能力の関連 進路指導研究, **19**, 35-43.
- 廣瀬英子 1998 進路に関する自己効力研究の発展と課題 教育心理学研究, **46**, 334-355.
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 1982 Locus of Control 尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討 教育心理学研究, **30**, 302-307.
- Luzzo, D. A., Funk, D. P., & Strang, J. 1996 Attributional retraining increases career decision-making self-efficacy. *The Career Development Quarterly*, **44**, 378-386.
- 文部省 1994 平成6年度 我が国の文教施策 財務省印刷局
- 文部科学省 2002 生徒指導上の諸問題の現状について (概要) 報道発表資料初等中等教育
- Rotter, J. B. 1966 Generalized expectancies for internal versus external locus of control of reinforcement. *Psychological Monographs*, **80**, 1-28.
- 竹綱誠一郎・鎌原雅彦・沢崎俊之 1988 自己効力に関する研究の動向と問題 教育心理学研究, **36**, 172-184.

谷冬彦 2001 青年期における同一性の感覚の構造 — 多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成 — 教育心理学研究, 49, 265-273.

鑪幹八郎 1995 アイデンティティ概念の歴史的意義について 鑪幹八郎・宮下一博・岡本祐子 (共編) アイデンティティ研究の展望 II ナカニシヤ出版 Pp. 9-21.

Taylor, K. M., & Betz, N. E. 1983 Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision. *Journal of Vocational Behavior*, 37, 17-31.

富安浩樹 1997 大学生における進路決定自己効力と進路決定行動との関連 発達心理学研究, 8, 15-25.

浦上昌則 1991 進路決定に対する自己効力測定尺度作成の試み 日本教育心理学会第33回総会発表論文集, 453-454.

浦上昌則 1993 進路選択に対する自己効力と進路成熟の関連 教育心理学研究, 41, 358-364.

浦上昌則 1995 女子短期大学生の進路選択に対する自己効力と職業不決断 — Taylor & Betz (1983) の追試的検討 — 進路指導研究, 16, 40-45.